



京都府立総合資料館蔵

【原文】

としは十のあまり四五の大ききして唇とつまさきのあかき。是なん都人にいきこととはん。そもくやつがれば丹波の国馬路といふ村にそだち。牛の角もじさへしらず。無下にかたくななり。棕の木のもにて榎の実を拾しと。友とちいどみあひしこそをろかにつたなけれ。年たくるまで糸竹のあそびといふは。魚釣竿の事とおもひ。なべとり公家といひなすは。筑摩の神の末くかとおやまり心うるこそあさましけれ。しらざるをしらすとしてしれる人にうかゞひしらまほしき事なり。けふは(二)牙是にして。きのふの非をさとすはいかにや。鮑魚の肆を出て。芝蘭の室をたづねんと。いとままうけて。花洛にまかり。甘艸と黄耆を。かみわけたる門にいりて。病のおこりをかながみればきるにかたく。ちびたる杵とへらぬ槌の月なみある扉をならし。滑稽のことにたづさはればあふぐにたかし。さればふかき井の道は水底くむに手たらず。とをき和哥の浦は見わたすにまなこをよばず。いづれのわざに身をそめ。日をくくりし

とやかこたん。せめて古郷のつとに。見ぬ京物語 (二ウ)

はほいあらじ。仁和寺の法師のひとり岩清水に

まうでつる事のあやしく。今少年のさかしきにあ

なひさせて。九重の外まで見めぐり。鳳闕のめで

たきつくり。神社仏閣のかたちを多かき。来歴を

しるしてよといへは。杜撰のことなりといなひながら

相如は上林を賦して盧橘夏熟する事を引

班固は西都を賦して比目を出す事あり。これみ

な文をかざりてそのまことあるをしらずとなり。所

謂鬼はあらはしやすく狗はうつしがたし。今黄吻

ねがはくは。詞の花をかざらず。その根を求ん。(二三)

所くまいりてとう下かうめされ。科をばいちや

がおはんとたはふれて。筆をはしらしむる。よりて

此草藁を京童と名づく。文章のをろかなる

は渠が年に罪をゆづり。事のあやまるは予

が僻耳のなす穴かしこからぬにゆるされをかふ

むらむ

【校訂本文】

年は十の余り四五の大ききして、唇と爪先の赤き、是なん都人に

いざ言問はん(注1)。

そもそも僕は丹波の国馬路(注2)といふ村に育ち、牛の角文字

さへ知らず(注3)、無下に頑なり。椋の木の下にて榎の実を拾いし

(注4)と友達挑み合ひしこそ愚かに拙けれ。年長るまで糸竹の遊

び(注5)と言ふは魚釣竿の事と思ひ、鍋取公家(注6)と言ひなす

は筑摩の神(注7)の末々かと誤り心得るこそ浅ましけれ。知らざるを

知らずとして(注8)知れる人に窺ひ知らまほしき事なり。今日は是に

して、昨日の非を諭す(注9)は如何にや。

鮑魚の肆(注10)を出て芝蘭の室(注11)を尋ねんと、暇受け

て花浴に罷り、甘草と黄耆(注12)を噛み分けたる門に入りて、病の

起りを鑑みれば鑽る(注13)に難く、禿びたる杵と減らぬ槌の月並み

(注14)ある扉を鳴らし、滑稽(注15)の事に携はれば、仰ぐに高

し(注16)。されば深き井の道(注17)は水底汲むに手足らず。遠き

和歌の浦(注18)は見渡すに眼及ばず。いづれの業に身を染め日を送

りしとや託たん。

中川喜雲 撰

せめて古郷の苞に見ぬ京物語は本意あらじ。仁和寺の法師のひと

り岩清水に詣でつる事(注19)のあやしく、今少年の賢しきに案内

させて、九重(注20)の外まで見巡り、「鳳闕(注21)のめでたきつ

くり、神社仏閣のかたちを描き、来歴を記してよ」と言へば、「杜撰の
ことなり」と否びながら、「相如は上林を賦して盧橘夏熟する事(注
22)を引き、班固は西都を賦して比目を出す事(注23)あり。これ皆
文を飾りてその真あるを知らずとなり(注24)。所謂鬼は表し易く狗
は写し難し(注25)。今黄吻(注26)願はくは詞の花をかざらず、そ
の根を求ん。所々参りて疾う下向召され。科をばいちやが負はん(注
27)と戯れて筆を走らしむる。よりて此草藁(注28)を『京童』
と名付く。文章の愚かなるは渠が年に罪を譲り、事の誤るは予が僻
耳(注29)のなす穴かしこからぬ(注30)に許されを蒙らむ。

中川喜雲 撰

【注】

(1) 『伊勢物語』九段「東下り」の次に記す箇所を踏まえ、「都鳥」を

「都人」に当て込む。

白き鳥の、はしとあしと赤き、鳴の大ききなる、水の上に遊びつ
つ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず。渡守に
問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にしおはばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと
とよめりければ、船こぞりて泣きにけり。

(2) 現在は京都府亀岡市馬路町。

(3) 「牛の角文字」とは、平仮名の「い」(一説には「ひ」)文字のこと。
文字が読めなかったことをいう。

(4) 「椋の木の下にて榎の実を拾う」とは、無理なことを承知で自分の
主張を押し通すことの譬え。

(5) 「糸竹の遊び」は音楽のこと。

(6) 老懸を付けた冠をかぶる公家。下級・貧乏な公家の蔑称。

(7) 滋賀県米原市にある筑摩神社の祭神。祭礼では八人の少女が鍋を
被つて神輿に供奉する。

(8) 「知_レ之_レ為_レ知_レ之_レ、不知_レ為_レ不知_レ、是知也。(これを知るをこれを
知ると為し、知らざるを知らずと為す、是れ知るなり。)(『論語』

「為政」)。

(9) 過去の過ちを今初めて悟ること。今是非非。

「実迷^レ途其未^レ遠、覚^レ今是而昨非^一。(実に途に迷^{みち}うこと其れいまだ遠からず、今の是にして昨の非なるを覚^さる)」「『文選』卷四十五・陶淵明「^一歸去來辭^一」。

ここでは、今さらどうしようもないことをいう。

(10) 「鮑魚の肆」は、臭い塩漬けの魚を商う店のことで、転じて悪い仲間や取るに足らない人物たちのこと。注(11)参照。

(11) 「芝蘭の室」は、芝蘭の良い香りのする部屋のことと、転じて徳の高い立派な人物たちのこと。

「与^レ善人居、如^レ入^レ芝蘭之室、久而不^レ聞^レ其香、即与^レ之化矣。与^レ不善人居、如^レ入^レ鮑魚之肆、久而不^レ聞^レ其臭、亦与^レ之化矣。(善人と居るは、芝蘭の室に入るが如く、久しくしてその香りを聞かざるは、即ちこれと化せり。不善の人と居るは、鮑魚の肆に入るが如く、久しくして其の臭を聞かざるは、またこれと化せり)」「『孔子家語』「六本」。

(12) 「甘草」「黄耆」ともに漢方生薬として使用される。

(13) 物事を深く研究すること。(注16)参照。

(14) 漢方生薬を粉碎・磨り潰す医家特有の木槌や薬研などの道具類とは違って、日常的な家財道具類の様子。平凡、ありきたりの意の

「月並」に、和歌・俳諧などの月例の会を意味する「月次」を懸

けている。

(15) 俳諧のこと。

(16) 「仰^レ之弥高、鑽^レ之弥堅。(これを仰げば弥高く、これを鑽けば弥堅し)」「『論語』「子罕」。

(17) 「医の道(医道)」を懸ける。

(18) 「和歌の浦」は、和歌山県の名勝・歌枕。和歌・歌学の意を懸ける。

(19) 『徒然草』五二段に、仁和寺の法師が案内者も伴わず一人で石清水八幡宮を参詣しようとして、本社が山上にあることも知らずに、麓の末社だけを参拝して帰ってきた話が記される。

(20) 都、洛中。

(21) 御所、皇居。

(22) 司馬相如(前漢の文人、前一七九〜一一七)の「上林賦」(『文選』卷八)に「於是乎、盧橘夏熟(是に於いてか、盧橘は夏に熟し)」とある。「盧橘」は「金柑」(枇杷)とも)の異名とされる。

(23) 班固(後漢の歴史学者、三二〜九二)の「西都賦」(『文選』卷二)には「揄^レ文竿、出^レ比目(文竿を揄ぎ、比目を出す)」とある。「比目」は「ヒラメ・カレイ」の異名とされる。相如の引用とともに、非現実的な例として出されている。

(24) 以上の「上林賦」「西都賦」に関する記事は、左思(晋の詩人、

三世紀頃の「三都賦序」(『文選』卷四)による。

然相如賦「上林」、而引「盧橘夏熟」、……斑固賦「西都」、而歎以「出比目」、……佞^ニ「称珍怪」、以爲「潤色」、……於^レ「辞則易^レ爲^一藻飾」、於^レ義則虛而無^レ微。

然れども相如は上林を賦し、盧橘夏熟するを引き、……斑固は西都を賦し、歎ずるに比目を出すを以てし、……珍怪を佞稱して以て潤色を爲す。……辞に於いては則ち藻飾^{そうしよく}を爲し易きも、義に於いては則ち虚にして微なし。

(25) 「鬼は頭はし安く、狗は写し難し」(『譬喻尽』)。

(26) 幼い者、未熟者のこと。

(27) 「いちや」は乳母や下女などの通り名。奉公先の子弟などが起こした過失の責を負うことを「科をいちやが負う」という。

(28) 草案 原稿。

(29) 聞き間違い、思い過(し)し。

(30) 「穴」は「僻耳」の縁語で欠陥の意。下文に「あな畏^{かしこ}」(ああ、おそれ多い)と続き、「かしこ」に「賢^{かしこ}(賢い)」の意を懸ける。

【現代語訳】

年齢は十四、五歳ぐらいの身体つきで、唇と爪先が赤い人は都鳥ならぬ都人の京童ですが、さあその京童に問うてみましょうか。

そもそも私は丹波の国の馬路という村に育ち、平仮名さえ読めず、見苦しいほどに頑固でした。椋の木の下で拾った実を榎の実を拾ったと強情に友達と言いつたりしたことは愚かなことでした。ある程度の年齢になるまで「糸竹の遊び」ということを「魚釣竿」のことと思ひ込み、世間で「鍋取りの公家」と言っているのは「筑摩の神の末端・子孫」のことかと誤解していたことは情けないことでした。知らないことは知らないと正直に物知りの人に尋ねたいものです。良しとする今のわが身から過去の誤りを反省してもどうしようもないことはありませんが。

つまらない人々の集まる故郷を出て教養ある人々の許へ出向こうと思ひ、暇をもらって京に参りました。生薬の甘草と黄耆を噛み分ける医道に入門し、病気の原因について勉強もしましたが、医学を修得することは難しく、医家ではなく擦り減った杵や擦り減らない槌が置いてあるような平凡な民家で催される月次の例会に出入りして俳諧に携わって見ましたが、これも容易なことではありません。だからといって深い井戸のような医学の道を究めるには力が足りません。ここから遠い和歌の浦を見渡すことができないように、和歌の道も究めることはできません。どれを生業にして暮らしていると言ひ訳すればよいのでしょうか。

せめて故郷への土産話にするにしても、見たことのない京の見聞物語は不本意なことです。『徒然草』には仁和寺の法師が一人で石清水へ参詣して失敗したことが記されていますが、そのように一人では不安ですので、今回は利発そうな少年に案内をさせて、洛中の外まで見巡りましたところ、少年は「御所の立派な建造や神社・仏閣の様子を描き、それらの来歴を書き記してほしい」と求めました。私はいい加減なことしか書けないと断りましたが、少年が言うことには、「司馬相如は「上林の賦」を作って「盧橘は夏に熟す」ということを記し、班固は「西都の賦」の中で「比目魚を釣り上げる」と書いています。これはすべて文章を潤色して事実に基づかず、真実を知らないのだとされています。世間では「想像上の鬼は描き易いが現実の犬は描きにくい」と言われます。ぼくは文飾は心掛けずに事実を書きたいと思います。あなたは各所を実際に見聞して早く故郷にお戻り下さい。文章の責任はぼくが取りまますから、などと少年が戯れながら言いますので、私は本書を書くはめになったのです。ですからこの草稿を『京童』と名付けます。文章が拙いのは少年の年が若いことで口実にできますが、事実に関する誤りは私の聞き誤りですので、恐れながら賢くない私に免じてお許しのほどをお願いいたします。

中川喜雲 撰

(藤原英城・小松謙・林香奈)